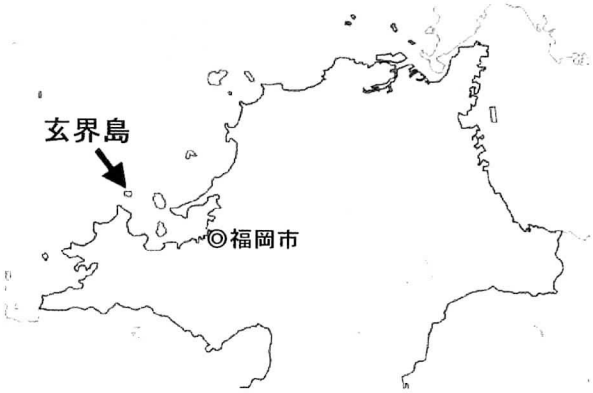
福岡県西方沖地震を振り返って
－復興　そして新たな発展へ－

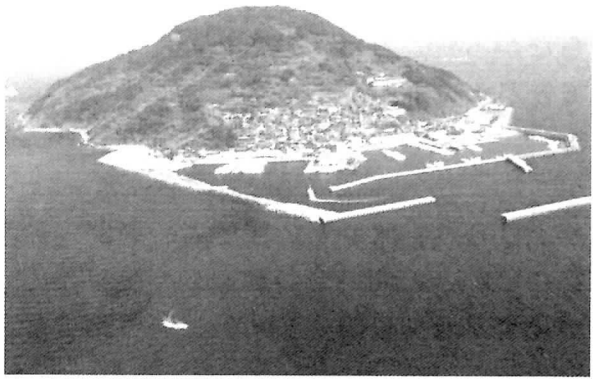
福岡市漁業協同組合青壮年部
細江　四男美

1．　地域の概要



私たちの住む玄界島は、福岡県の西部、玄界灘に位置する周囲約４キロの島である。ちょうど福岡湾の入口にぽっかりと浮かぶ小さな島の姿は、福岡市都市部からもよく見ることができる。週末には、島と博多港を結ぶ定期連絡船で、島外から多くのレジャー客も訪れるなど、市民の皆さんに親しまれている。

島の人口は約 700 人、全世帯の７割が漁業で生計を立てている典型的な「漁業の島」である。



玄界島

2．　漁業の概要

福岡市漁協玄界島支所は、正准合わせて 141 名の組合員が所属している。島の豊かな漁場を活かした様々な漁業が盛んであるが、とりわけ一本釣りの漁師は伝統的に遙か遠方まで出漁するなど、玄界灘の中でも屈指の「元気な漁師」として知られている。年間の漁業生産量・生産額は、ここ数年約 800 トン、６億 5,000 万円である。

3．　研究グループの組織と運営

玄界島支所に所属する青壮年部員は、現在 25 名であり、島の基幹産業である漁業の主要な担い手として、漁業のみならず、島の各種の行事において、中心的な役割を果たしている。

青壮年部としての主な活動は、漁場クリーンアップ、操業や漁業経営に関する各種の研修・情報交換等であるが、近年では、特に島の将来のあり方についての関心が非常に高く、メンバー各人が情報や意見を積極的に持ち寄って議論し、種々の取り組みを進めている。

4．　研究・実践活動取組課題選定の動機

近年、沿岸漁業は、魚価の低迷・燃油の高騰・後継者不足などの難しい問題を抱え、苦難の時代にある。特に私たちのような離島の漁業者にとっては、地理的な条件も加わって、非常に大きな課題になっている。青壮年部でも、島の将来を担う立場として、このような課題にどう対処すべきか、またどのように島を振興させていくべきか、日々議論を重ねていた。

震災被害の状況

そんな中、平成 17 年３月 20 日、あのマグニチュード 7.0 福岡県西方沖地震が発生。私たちの島は、重軽傷者合わせて 19 名、家屋の損壊 214 棟、うち半数が全壊という、壊滅的な被害を受けた。

私たち青壮年部のメンバーは、漁協役員・消防団とともに、住民の約９割を島外に避難させた後も、島に残って、被害状況の確認や応急処置等、緊急の対応を行った。

時折起こる余震に脅かされながら、避難所で不自由な共同生活をする仲間たちと連絡を取り合い、再び平穏な暮らしを取り戻せる日を待ちわびる日々は、不安と緊張に満ちた長い時間だった。ただ、同じ苦しみを分かち合うことで、地域の連帯・仲間との絆がこれまで以上に深まっていったことも、同時に感じていた。

そして震災から１ヶ月余り、４月下旬に、福岡市中心部と玄界島に、それぞれ仮設住宅が完成し、避難生活からやっと解放され、漁も再開することができた。

この時を契機に、私たち青壮年部員の胸に、大きな気運が盛り上がってきた。それは、元の安心な暮らしを取り戻すことはもちろん、今回の、島の歴史を大きく変えたこの最大のピンチを、逆に最大のチャンスとして捉え、青壮年部を先頭に島民一丸となり、島を盛り上げていこう、ということだった。

5．　研究・実践活動状況及び成果

今回、震災のことが広く報道され、一般市民の皆さんから、心配や励ましの声を沢山頂き、非常に心強く感じていた。その声に応える意味で、青壮年部として、島のアピール活動に取り組むことにした。活動計画を立てるに当たっては、青壮年部長を中心に、他の漁村地域や漁業以外の分野の事例について情報を集約し、研究を行った。

(1) ユニフォームと合い言葉

まず、メンバー全員で、活動の合言葉である「元気バイ！！玄界」のロゴマークの入った公式ユニフォームをまとい、元気な玄界島をアピールすることにした。明るい海の色をイメージした鮮やかなブルーの上着と、背中に大きく書かれた「元気バイ！！」のメッセージは、以後の様々な活動において大変目立ち、これを目にする人々に「元気な玄界の漁師」のイメージを強く印象づけることに成功した。

(2) ロゴマーク入りの魚の出荷

ロゴマーク入りの出荷

玄界島の漁の主力は一本釣りであり、1尾1尾丁寧に血抜き等の処理を行うため品質が良いが、魚の名産地としての「玄界島」の名前はこれまで一般にあまり知られていなかった。

そこで、魚を出荷する際、トロ箱に「元気バイ！！玄界」のメッセージが入ったステッカーを貼り付ける活動を実施した。玄界の魚と共に私たちのメッセージが広く届くよう、出荷先となる魚市場などの流通業者にも協力を求めたところ、やがて「玄界島の魚、美味しかったよ！」と多くの方々の声を聞くようになり、「震災の島」のイメージから抜けだして「美味しい魚の産地」としての声価を大きく高めることができた。

(3) イベント展開

博多どんたくパレード

上記の出荷・販売改善の取り組みを行う中で、さらに一歩進めて、消費者である市民の皆さんと直接触れ合うことを目的としてのイベントを実施した。

まず、地元の福岡市最大のお祭りである「博多どんたく」期間中に、博多港前の海上で漁船によるパレードを実施。あわせて、大通りでの大漁旗パレードも行ったところ、沿道の市民の皆さんから大きな励ましの拍手喝采を頂き、大変感動した。

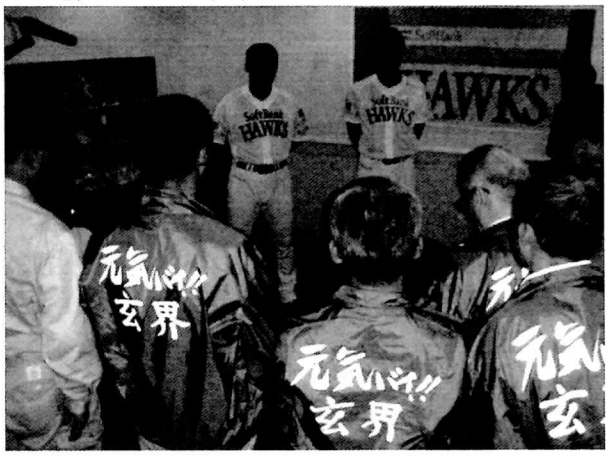
各種イベントでの魚の格安販売

また、秋の福岡市農林水産まつりでは、島の新鮮な魚介類の無料配布のほか、島伝統の魚料理を振る舞った。そのほか、福岡で開催される各種イベントを積極的に活用して、魚の格安販売を行うなど元気な玄界島をアピールし、来客の皆さんにも大好評を博した。

これらの活動を実施して以降、魚を出荷している流通関係者等から「最近、料理店等から、"玄界島の魚"と名指しで注文を受けることも多い」との声も聞き、市場での価格評価も向上したとの感触を得ている。

このことは励みとなると共に、私たちの活動の成果の一つとして大きな自信になった。

(4) 地元プロ野球球団の協力



ソフトバンクホークスからの応援も

上記のようなイベントを通じて、一般消費者の皆さんと交流を持つことができたが、さらにもっと広い範囲の人々にもアピールするために、プロ野球ソフトバンクホークスの公式戦でチャリティー試合をお願いした。当日は，ヤフードームに大漁旗を持ち込んで、観客の皆さんに元気な玄界島をアピール。松中・斉藤両選手からも、熱い応援メッセージを頂き、チケット売り上げの一部と募金を、島の復興資金として寄付して頂いた。

この取り組みは、普段魚や海に関心のない人々にも、私たち玄界島のことを知ってもらうきっかけとなり、その後の島の振興に向けた取り組みを進めるための一助となった。

6．　波及効果

(1) 地域の連帯、島に活気

避難生活を通じて、苦しみを分かち合いながら、島の復興に向けて島民一丸となって活動を行ってきたことで、地域の連帯がさらに強まり、島に活気が戻ってきた。特に、私たち青壮年部が島の中心となって将来を担っていくという自覚と気運が高まった。

(2) 市民との交流の促進

従来、離島という不便さもあって、都市部との人的交流があまり活発ではなかったが、今回の活動を通じて、各種イベントの来場者や市民ボランティアの皆さんとの交流を持つことができ、島の暮らしや文化に対する理解を深めて貰うことができた。

7．　今後の課題や計画と問題点

昨年３月２０日、島の県営住宅が完成し、島外の仮設住宅で生活していた島民がようやく帰島することができた。今後予定されている島の漁村集落・漁港施設の復旧に伴い、本来の漁業活動にも本格的に取り組むことができると期待される。

これまでは震災被害からの復興活動と並行しての取り組みだったが、今後はこれまでの成果を活かして、資源管理型漁業の推進や漁獲物の付加価値向上等、よりステップアップした取り組みを行い、復興後のさらなる発展を目指して、青壮年部の活動を続けて行きたい。

なお、皇太子殿下の仮設住宅への行啓、さらには天皇・皇后両陛下の島への行幸啓の栄を賜り、島民一人一人に、温かい励ましの御言葉を頂戴致しましたこと、厚く御礼申し上げます。